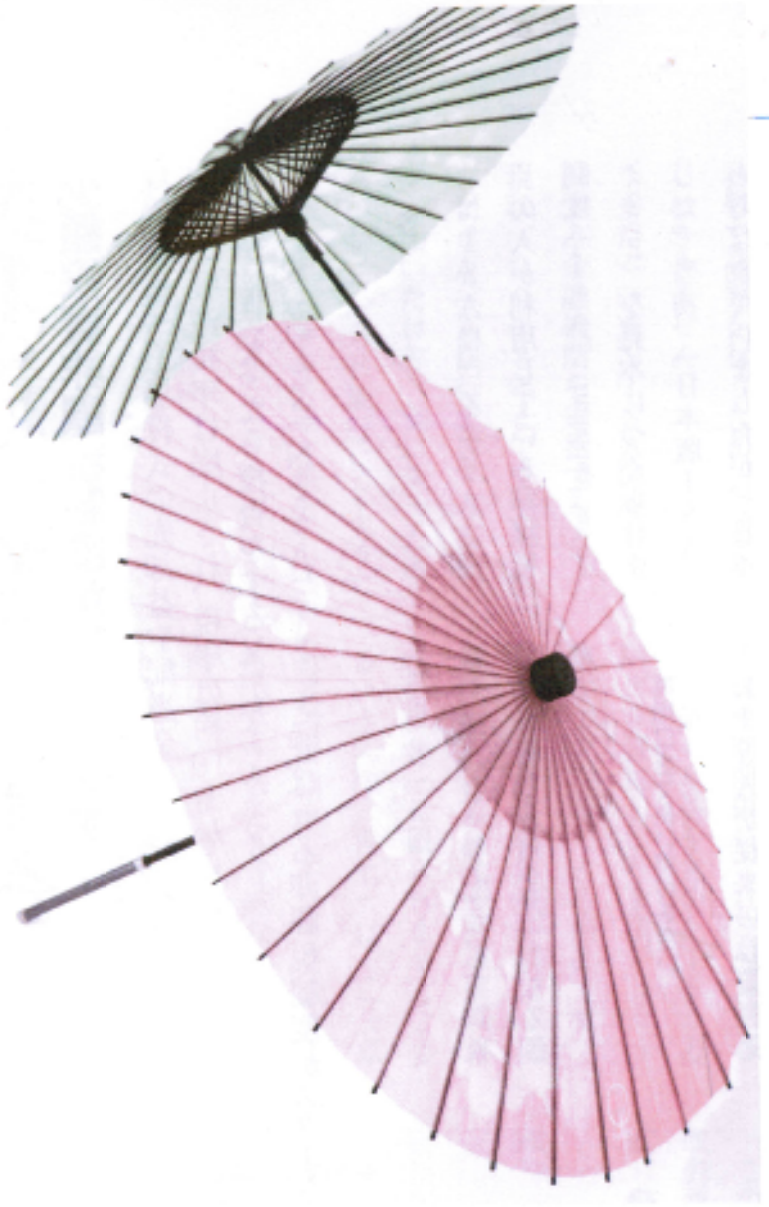
アベニュー

青森銀行

国井律子のハーレー・バレ島根旅
NISAの世代別かしこい活用法
分配金が出ていれば儲かっている?
シャボン玉家族をつなぐ成年後見制度
じぇじぇ、いま厚生年金をやめたほうが
もらえる年金が増えるってホント?

20号



銘品をたずねて

日吉屋

撮影／福森クニヒロ

洋傘と和傘はあべこべだ。傘をしまうとき、洋傘は先端を立てるが、和傘は手元を立てる。洋傘を畳むと生地が表側に、和傘は生地が内側に折り畳まれる。ほとんどの日本人は洋傘を持っているが、和傘を持つ人は1万人に1人くらいだろう。

市役所に勤めていた西堀氏が初めて和傘に触れたのは、妻の実家である京和傘の老舗「日吉屋」を訪ねた時だった。

傘を広げると、生地の和紙は光をやわらかく通してぬくもりが感じられ、幾何学模様に見える竹の骨組みはクールでもある。「かっこいい」と思った。

だが、店は業績不振のため閉店するという。自分のように和傘に興味を持つ人はいる。「1万人に1人」でも、1億人になら1万本売れる。西堀氏は日吉屋に通い詰め、和傘づくりを習いながら、インターネット販売を始めた。やがて和傘の魅力に多くの人が気付き、注文が入るようになる。

西堀氏は日吉屋を継ぐ決心をし、5代目当主となった。和傘の販売は順調だったが、いずれ頭打ちになる。西堀氏は、和傘の「かっこよさ」を応用できないかと考えた。試行錯誤の末、和紙の透過光や、傘骨の構造を活かした照明を発案。『古都里（ことり）』『MOTO』と名付けられた照明は国内外で高い評価を得た。

今年、『ryoten』という新しい傘をリリースした。「両天（ryoten）」、晴雨兼用を意味するこの傘は、和傘の欠点である大きさ・重さ・耐久性を克服しながら、自然素材を中心に作られている。骨組みは竹、生地はサトウキビ由来のバイオプラスチック。柄は伸縮し、軽く携帯性に優れている。「伝統は革新の連続」が西堀氏の信条だ。

新製品を送り出す一方、和傘という原点は忘れない。茶道とのつながりが深い日吉屋は、エリザベス女王が初来日した際の野点用の傘も作っている。寺社で用いる傘の修復にも力を入れる。

ryotenを開いてみる。生地から透ける光、精密な骨組み。ぬくもりがあって、クールだ。和傘に人生を賭けながら、和傘にとどまらない西堀氏の気概が伝わる。

株式会社 日吉屋　本店：京都府京都市上京区百々町546　電話：075-441-6644
URL: http://www.wagasa.com/